日本人に私たちの神を紹介する

２０１９年　１０月
西九州伝道所
佐々木正明

創世記の１章１節は、神の自己紹介です。神はここで、多くの神々を拝んでいた当時の人々に、ご自分がそれらの神々とはまったく次元の異なる神である、いわば、神ではない神、万物の造り主なのであると、自分を紹介しておられるのです。多くの人々が、人間として決して礼拝すべきものではないものを、神に祭り上げて礼拝している社会で、まず、人間が礼拝すべき本当の神はだれなのか、はっきりさせなければならなかったのです。

現代の日本も同じ状況にあります。私たちは、私たちが礼拝している方を、日本人に上手に紹介しなければなりません。でも、一方では八百万の神々を崇めているといわれながら、他方では唯物論に強く影響され、「神なんていない」と言ってはばからない多くの日本人に、「天地創造の神」と言って紹介するのでは、ギャップが大きすぎます。どのように、したら良いのでしょう。

Ⅰ.　自分の本当の宗教心に気づかせる

日本人は非常に混乱した宗教感覚の中に生きています。そのために、自分自身の宗教心について、あるいは信仰についてさえ、しっかり理解しているわけではありません。それを少しばかり整理し、正しく理解してもらうことが大切です。そのさい、日本人の神感覚の間違いや不足を指摘するのは簡単ですが、それをやったのでは、日本人は心を閉ざしてしまいます。それよりも、日本人の神感覚の優れている点、素晴らしいところを取り上げてそれを気付かせ、そこから話を進めたほうが賢いと思われます。

Ⅰ. 1. 消えない宗教心

多くの日本人は神なんて存在しないと言います。ところがその舌の根が乾かないうちに神社に詣で、お寺に参ります。歴史のどの時点をとっても、また日本中のどの地方を見ても必ず宗教があり、人々はなにかを礼拝していたことが明らかです。人間には神に似せられて造られたという事実があり、神と心を通わせることができる本能がしっかりと残っているために、宗教心を消し去ることができないのです。人間とは何かを礼拝し、祈る動物なのです。だから、「神はいない」という人たちでも、人間の宗教心自体を揶揄したり、宗教そのものを悪く言ったりすることはまれなのです。

宗教は未開発の人間の妄想や迷信ではなく、人間の人間たるゆえんであることを、理解させてあげましょう。唯物論が世界中を覆った時代には、多くの人々が宗教を低級なものと断じて、やがて消滅すると考えましたが、人間の本能が消滅することはなく、変わることもありませんでした。かえって今は物理学そのものによって、唯物論は疑わしい理論であると、指摘される時代になっているのです。

日本人の多くは、「神はいない」などと言いながら心に宗教心を抱えていることに、なにか恥ずかしさ、後ろめたさを感じています。この恥ずかしさ、あるいは後ろめたさを取り除いてあげ、自分がまじめになったときに感じる宗教心こそが、自分があらゆる動物と異なることの証であり、人間であることの証拠であると理解してもらうのです。

Ｉ．２．　崇高なお方

ほとんどの日本人が、自分たちは多くの神々を奉じていると考えています。八百万の神々と言われているとおりです。ところが一方では、それらの神々を「愚かしい」とも感じています。自分が本能的に感じる「礼拝すべきお方」は、このような神々ではないと、心のどこかで知っているからです。

大多数の日本人は、「かみ」というもの、あるいは「かみ」という言葉に、胡散臭さを感じてもいます。「かみ」という日本語は、本来「うえ」という意味です。ですから、日本では位の高い人、力のある人を「かみ」と表現してきました。今でこそ輸入された漢字を用いて、「神」「守」「頭」「上」などと書かれますが。本来は同じです。大名は「頭」であり、役所は「お上であり」家の中で力を持つのは「おかみさん」であり、宿屋や料亭を仕切るのは「女将」であり、一番上にある毛は「かみの毛」です。そのために、少しでも能力の高いものはなんでも神に祭り上げられます。料理の神、外科手術の神、野球の神が次々と作られています。人間よりなにか優れた能力を持っている動物も、簡単に神にされるので

す。

日本人にとっての「神」は、その程度のものです。これらを神々と呼んでも、また、その力にあやかりたいと願っても、人間が礼拝すべき高貴な「お方」ではないと、まさに本能的に感じているのです。だから日本人は、神はいないと言ってはばからないのです。日本人は、自分が礼拝すべきお方はもっと高貴で崇高なお方であると感じ、巷の神々を冷たい眼差しで見ているのです。ところがこのお方をいざ礼拝しようとすると、この方のことが皆目分かりません。だから、目に見える物や、頭で理解できるものに礼拝の心を向けるのです。でも、それらのものに心を向けたとたんに冷めて、ばかばかしくなって思うのです。「これらは自分が礼拝すべきものではない。」

Ⅰ.3.　自分たちを生かして下さっているお方

多くの日本人は、自分たちは「なにかに生かされている」という共通の感覚を持っています。目に見えず、手で触れることも、言葉で表現することもできないけれど、「どなたか」が、自分たちを養い育んでくださっていると、心の奥底で感じているのです。しかもこのお方は大きく、強く、恵みと優しさに満ちた、心が広く豊かなお方に違いないと感じています。なぜなら、小さく弱い自分たちを守り支えて、自分たちの足りなさや間違いを見逃し、悪も欲も赦して、太陽を昇らせ、雨を降らせ、作物を稔らせ、生かし続けていてくださるからです。そのために、あたかも自分ひとりの力で生きてきたかのような言い方は、傲慢であり、人間として未熟であると判断されて好まれないのです。

Ⅰ．４．感謝の心

日本人の多くは、自分の力だけで生きているのではなく、大きな恵みに生かされていると感じているために、感謝の気持ち、ありがたいという心を持っています。多くの場合、この感謝は身の回りの自然物に対して表現されます。今でこそ、「米粒一つ一つに感謝をする」などという言い方はなくなりましたが、食事のときに、「頂きますと」言うのは、必ずしも食事を作ってくれた人や、食事の経費を出してくれた人に対するものではなく、食べ物そのものを与えてくださっている、「大きなお方」、食べ物それ自体のうちにもいて下さる、「目に見えない誰か」に対するものでもあると、かすかに感じているのです。

このかすかな感覚を、日本人はさまざまなときに呼び覚ましています。そびえる山に向かうと感謝し、清らかな水の流れに出会うと感謝し、苔むす深山に入ると感謝し、黄金色

に稔る田に立つと感謝します。そしてその集大成は太陽に対する感謝です。太陽があらゆる良いものの源であるかのように感じるからです。そこから、この太陽を神格化した天照御大神を拝み、あたかも日本人の本源的神であるかのように言ったりします。ただし日本人は、天照御大神が本当に日本人の礼拝すべきお方であると、思っているわけでもありません。太陽という「物」を神としているのではなく、太陽に象徴される、恵みの源に感謝を捧げようとしているのです。

Ⅰ．５．　どうしたら良いのか分からない

ただ、日本人はどのように感謝をしたら良いのか良く分かりません。誰に感謝をしたら良いのかが、はっきりしないからです。それで、いろいろな感謝の表現をしていても、なにか曖昧になってしまって、感謝なのか単なる楽しみなのかわかりません。誰かに対しての感謝の行事なのか、単なる喜びと祝いの行事なのか不明になっているのです。

日本人は基本的に農耕民族でした。春祭りは、農作業ができる季節をめぐらせ、植え付けができるようにしてくださったお方に感謝し、豊作を願う行事でした。秋祭りは収穫させてくださったお方に対する感謝の行事だったのです。また日本人は、昔からさまざまな奉納を行ってきました。それは自分たちを守り、祝福し、必要なものを恵み与えてくださるお方に対する、感謝の捧げ物を意味していました。多くは農作物や自分たちが作り出したものを捧げるものですが、品物だけに限らず、歌や踊りや武芸なども奉納として行われてきました。奉納相撲などは特に良く知られ、どこの神社にも土俵があったものです。「おかげさまで、自分たちはこんなに元気に生活しています」という感謝と喜びを、見えないお方に対して表現して相撲をとったのです。

Ⅱ．　感謝の対象をはっきりさせる

そこで大切なのは、感謝の対象、誰に感謝すべきなのかをはっきりさせることです。日本人は誰ということに対しては極めて曖昧です。これは非常に良いことである反面、とても悪いことです。

非常に良いというのは、日本人が真実の礼拝の対象を「わからないお方」としている点です。自分たちを生かしてくださっている大きなお方は、人間の知恵や才覚で理解できるような小さなお方ではなく、人間の表現力で刻んだり描いたりすることができるような底の浅いお方でもなく、自分たちの足りない言葉と表現力で説明できる次元に住んでいるお方でもないと、本能的に感じ、ただ恐れ敬い、感謝を捧げることしかできないし、それで

良いと感じていることです。そのために、日本人本来の宗教感覚では、偶像がないのです。神々の名をつけ、神社を建て、祠を作り、そこに神々を祀りますが、そこに神々の影像があるわけでも、絵があるわけでもありません。見えないお方を見えないままにしているのです。

昔、西行法師が伊勢神宮を訪れたときに、「なにごとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と詠みました。西行は多くの日本人に共通の感覚を持っていましたので、伊勢神宮に祀られている天照御大神に「かたじけない」と感じたのでも、豊受御大神に「ありがたや」と言ったのでもなく、人に作られたそれらの神々の背後に、実体としておられるに違いないお方、なんとお呼びしていいのかさえ分からない大きなお方を感じて、「涙こぼるる」と表現したのです。

とても悪いというのは、目に見えないまま、言葉で表現できないままにしているために、さまざまな混乱が起き、いろいろな迷信や俗信が紛れ込んでしまうことです。純粋な感謝の表現が、たちまち人間の恐れや恐怖心の表現と混同され、多くの俗信に侵食されてしまって、見分けがつかない状態になっているのです。そのために本来の高尚な神意識が、八百万の神々などという一段も二段も低い神概念として、表現されるようにもなっているのです。ただ、崇高な神意識が完全には消滅していないために、八百万の神々も完全には偶像化されずに、「よくわからないまま」に放置された状態なのです。八百万の神々が、たとえば「馬の神様」、「蛇の神様」と特定の姿かたちが与えられ、名前が決められると、日本人の多くはたちまち「おろかなもの」として、退けてしまうのです。

さらに、礼拝の対象であるべきお方をよく分からないままにしておいたために、日本人独特の観念論を生み出してしまいました。これは信じる対象が大切なのではなく、「信じる心が大切なのだ」などという、都合の良い言葉で表現されます。「いわしの頭も信心から」とも言われます。「神かもうな、仏ほっとけ」「触らぬ神にたたりなし」という言い方もあります。これらの言葉にも的を射た面もありますが、本当に感謝し恐れ敬うべきお方を軽々しく扱うことにつながり、本来、最も大切であるお方を、自分の生活からは締め出してしまうことになるのです。日本人は非常に宗教的であり、より高度な神意識を持ちながら、宗教が日常の生活に密着していない理由が、このあたりにありそうです。

そこで必要なのは、私たちの近くにおられて、私たちに強い関心を持ち、私たちの日常に深く関わっておられるお方について、お話してあげることです。

Ⅱ．１．　私たちを祝福してくださっているお方

私たちが感謝を捧げるべきお方は、私たちを生かし、私たちにすべての必要なものを与え、はぐくんできてくださった方です。日本人はおぼろげであったとしても、私たちに命を与え、生かし続け、はぐくんでこられたお方を感じています。たとえうっすらとではあっても、そのように感じている事実を認め、肯定し、賞賛し、それを積極的に認めて、感謝の心で生活することの大切さを語るのです。同じように生活していても、感謝しながら生きるのと、不満ばかりを募らせて生きるのでは、まったく違う人生になるからです。

Ⅱ．２．　私たちが昔から礼拝してきたお方

このお方は、日本人にとってまったく知らない存在ではありません。日本人は、良くは分からないままにも、昔からこのお方を崇め、祀ってきたのです。私たちの先祖は、おぼろげな感覚ではあったとしても、厳かな気持ちになったときには必ずこのお方を感じ、まじめに感謝をしてきたのです。

わたしたちが紹介しようとしているお方は、キリスト教という外国の宗教の神ではなく、神代の昔というより、日本人の先祖が日本に定着する前から日本にいてくださり、日本を祝福し続けてくださったお方であり、良くは分からないままにも、日本人が感謝と礼拝を捧げてきたお方なのです。

Ⅱ．３．　唯一の神

日本人は多くの神々を信じているといわれますが、はたして本当でしょうか。確かに八百万の神々といわれますが、すでに述べたように、この神という概念は、西欧キリスト教諸国の人々がいう「神」とは、まったく異なり、むしろ、聖書の中に出てくる、悪霊とか、み使い、あるいはさまざまな霊に近いものです。

ただし日本人の神々は、聖書のみ使いや悪霊ほどの現実感も存在感も持っていません。少なくてもみ使いや悪霊はさまざまな力をもって、人間の生活に直接関わってきます。ところが日本人の神々は、それほどの力さえも持っていません。時には天災などを荒ぶる神のせいにしますが、その場合でさえ、臨場感の伴うものではありません。

日本人が恐れているのは神々ではなく、幽霊に代表されるさまざまな霊どもです。日本人にとっての神々は、ほとんど御伽噺の存在ですが、幽霊を始めとする様々な霊どもは、もっともっと現実感のある恐ろしいものなのです。理屈ではばかばかしいといっても、本能的に現実感を伴う恐ろしいものなのです。

とはいえ日本人の中にも、八百万の神々を人間以上の力を持つものとして、恐れる人もいないわけではありません。反対に敬ったり、願いを捧げたりする人々も、少しはいることでしょう。でも、たいていの人は少しも現実感を伴わない、「ばかばかしい」ものとして退けてしまいます。

多くの日本人が「ばかばかしい」と思わないで、怖れを感じ敬っているのは、「よく分からない神」です。泉や流れや森や木をはじめ、あらゆるものに潜んでいると考えられ、そこここにつくられる祠に象徴され社に表現されている、よくわからない存在です。とりあえず、「神」と呼んではいますが、八百万の神々の神とはなにか違うようにも感じるのですが、どこが違うと言われても答えようがない神です。

これは、八百万のような多神論的な神々ではなく、すべての自然物には神秘的な力が宿っていると感じる、汎神論的な感覚です。宿っている神秘的な力を単なる力ではなく、人格的なものであると見ると「神」に近くなるのですが、「神」とは違うものです。神とは違うと感じられていながら、ほかに表現の仕方がないので、「神」として神社に祀られることもある存在です。多くの立派な神社に祭られている神々は、多神論的な神々とは少しばかり趣をことにしています。確かに多神論的感覚も混ざってはいるのですが、むしろそれらは、汎神論的な、存在者を象徴的に表現しているものに近いと思われます。

日本人は、すべての自然物に多神論的な感覚とは違う怖れを持ち、畏敬の念を抱いてきました。むろん、多神論的感覚との混同もあるとはいえ、より多くの日本人はむしろ、すべてのものには同一の存在者が宿っていると感じています。水を祀る神があり、山を祀る神があっても、それは別々の神々ではなく、一つの存在の、別々の表れだと感じているのです。

ですから一般の日本人は、どこの大社に詣でても、小さな社に訪れても、道端の祠に出会っても、同じ気持ちで手を合わせることができ、そこに祀られている神々のいわれや名前などには、ほとんど興味を持たないのです。縁結びの神だといわれても、学問の神だといわれても、海の神だ山の神だといわれても、そのようなことにはほとんど頓着せずに、参拝します。あまり正確に学問の神だと限定したり、縁結びの神だ、漁の神だと役割分担をさせたりすると、かえってそれに人為的なおろかさを感じて、直感的に「そうではない」と判断してしまい、神社参拝も縁起かつぎに落ちぶれてしまうのです。

この感覚は、たとえ確固としたものではないとしても、唯一神信仰に近いものです。山の神、海の神、雨の神、作物の神がおられるのではなく、たくさんある道端の祠の中に、それぞれ違った神々がいるのでもなく、唯一のお方がそれぞれの場で、存在を認めた人た

ちによって拝まれていると、理解したほうが良いように思われます。実際、筆者がごく普通の日本人と話してみて、そのように彼らの宗教観を整理してみると、ほとんどの者が納得するのです。彼らは多くの神々を拝んでいるのではなく、多様な現れ方をしている「唯一のお方」を拝んでいるのです。

私が話してみた日本人は、パウロが語った言葉を、ほとんど何の変更も注釈も加えずに受け入れることができます。つまり、日本人が本能的に心で感じているのは「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられ、すべてのものをご自分の内に収めておられる」お方だということです。（エペソ４：6、使徒 17：28） 日本人の多くが、多神論と汎神論とを混ぜ合わせた感覚を持っていることは、まちがいありませんが、もっと強烈にというか、明確に、一神論的汎神論を持っています。

自分たちの中にあるこの一神論的感覚に気づかせ、そこから天地を創造された唯一の神に橋渡しをすると、日本人は案外素直に聖書の神に納得できるのです。聖書の神はまさに、唯一でありながら、すべての物を貫き、内在されるお方なのです。しかもそれらのものに影響も制限もされず、超越しておられるのです。

Ⅱ．４．　天地を創造されたお方

日本人がまじめになったとき心に感じるのは、このように、聖書が教える天地の創造者の概念に近い存在です。非常にかすかで、おぼろげであり、不純物もたくさん混じっているとはいえ、日本人の中には、創造者のイメージがまだしっかりと残っているのです。日本人は、太陽を昇らせ、雨を降らせ、山や森を与え、川や海を与え、すべての緑とすべての生き物を与えてくださったお方に、ありがたいと感謝をし、かたじけないと涙をこぼしてきたのです。ただ、ともすれば卑俗な多神論的感覚に流されたり、仏教の影響もあって、偶像礼拝に染まりそうになったりもしてきました。それでも完全に堕落しきることはなく、最後の一歩を踏み止まってきたのです。

日本人が心に感じ、そっと感謝を捧げてきたお方を、私たちは天地の創造者として崇め、拝み、感謝し、尊んできました。私たちは聖書という書物に教えられて、より鮮明にこのお方の姿を心に描くことができるようになっただけで、自慢できることではありません。このお方が、ご自分のほうから人間に現れ、自己紹介をしてくださったのが、聖書の記されていることなのです。

Ⅲ．　不義理をお詫びするように勧める

日本人は、自分が生かされていると感じて、強い感謝の気持ちを持っています。ただ、誰に感謝すべきなのか、どのように感謝すべきなのか良く分からなかったために、曖昧なままに過ごしてきたのです。

南の国でのお話です。海でおぼれて気を失ったところを、助けられた少女がいました。命を賭けて助けてくれた男の人は、少女を陸に引き上げると、集まってきた人たちに少女を任せ、そのまま名も告げずに身を隠してしまいました。でも、「背中には般若の刺青をしていたそうだから、日陰者として、名前を知られないように生きていたのかもしれないね」と、お父さんが話してくれました。

少女は、この男の人にいつも心の中で感謝していました。でも、どのように感謝すべきか分かりませんでした。ただ、命を助けられた自分だから、人の命を助ける仕事をしたいと、一所懸命がんばってとうとう女医さんになりました。都会で大きな病院で働くようにという勧めを断って、彼女は過疎化の診療所に勤めて働き続けました。

無医村を巡回して人々を助ける女医として、人々の尊敬を一身に集め、いろいろな感謝状もたくさん受けるようになった彼女のところに、ある日、破傷風で一刻を争う患者が運び込まれてきました。厳しい農作業で日焼けした細い背中には、般若の顔がしなびて張り付いていました。

彼女はいままで貯めてきた感謝の気持ちを、一気に注ぎ込みました。あらゆる手を尽くして治療し、夜も寝ないで看病を続けました。看護婦が心配しても、彼女は自分で看病をしたのです。「やっと命の恩人に感謝ができる、恩返しができる」と、ただそれだけの思いで尽くしたのです。

男が危険から抜け出たとき、40 年以上も昔に、海でおぼれて死に掛かっているところを助けられた小娘が、自分であったことを話し、あらためてお礼の言葉を述べました。でも男は言いました。「お礼を言わなければならないのは、私のほうです。わたしは二度も、あなたに命を助けられたのです」

「40 年前、チンピラぶって身を落とし、生きるのもいやになって死に場所を求めていたのです。ところが、偶然、あなたを助ける羽目になってしまった。それで、自分は考え直したんです。俺のようなものでも、人を助けることができた。まんざら悪い人生ではないと。それから私は、心を入れ替えて、生きる決意をしたのです。つらい目にもあいました。でも、あなたが助かったということが、私の生きる力になったのです」

ふたりは互いに手を取り合って、互いに感謝ができるようになったことを、喜んだということです。

Ⅲ．１．　大きな不義理を重ねてきたことを認める

日本人は、自分が生かされていることを感じて、ひそかに感謝をし続けてきました。時には捧げものをもって祭りを行い、歌を歌い、踊りも踊って、感謝を現してきました。でも、誰に感謝をしたら良いのかよくわからなかったために、充分な感謝にはなりませんでした。正しい感謝の仕方であったかも自信がありません。命を与えられ生かされ、必要なものをあたえられて来た大きな恵みに比べて、捧げた感謝はあまりにもささやかで、おざなりのものではなかったでしょうか。それこそ、失礼に当たるほど、ちっぽけな感謝であったかもしれません。

日本人は礼節を重んじます。でも、自分たちを生かしてくださっているお方に対しては、礼節を欠いて、不義理を重ねているのではないでしょうか。天地を造り、人間を造り、人間が幸せに生きるように、あらゆるものを整えてくださったお方に対して、私たちは不義理という「罪」を犯し続けているのです。

Ⅲ．２．　大きな不義理をお詫びする

不義理は、気づいたときにしっかりとお詫びをすることが肝要です。そこから正しいお付き合いが始まるのです。私たちと、天地をおつくりになった大きく気高いお方のお付き合いも、私たちが不義理をお詫びするところから、新たに始まります。不義理を詫びたとき、天と地をおつくりになったお方は、とてもお喜びになり、わたしたちを新たな祝福で覆ってくださるのです。

不義理をお詫びするようなとき、人間は必ずその心を表現するために何らかの貢物をします。宗教的に言うと犠牲を携えていきます。ここから、人間の不義理の罪はあまりにも大きくて、人間にはどのようにお詫びしても足りないので、天地の創造者のほうからこの問題を解決してくださったと話し、イエス・キリストによる完全な犠牲について語ることができるでしょう。とはいえ、この時点でキリストを持ち出すのは早すぎるように感じます。ですから、心からお詫びをする。お詫びの言葉を述べるということにとどめておくのが良いと思います。

キリストの贖いという神学を持ち出す前に、創造者との正しい関係を理解してもらうこ

とのほうが先決です。創造者は、日本人がキリストの贖いを理解しなければ、ご自分との正しし関係に入ることができないとはおっしゃっていません。日本人と創造者の正しい関係は、日本人が創造者の贖いの働きを正しく理解することによるのではなく、創造者を創造者と認め、信頼して生きることによるのです。救いは人間がキリストによる贖いの業を正しく知ることによらず、神がご存知であるキリストを通しての贖いによるのです。

Ⅳ.　このお方に喜ばれる生き方をするように励ます

次に大切なのは、このお方に喜んでいただけるような、生き方を心がけることです。今まで充分に感謝を表現してこなかった不義理をお詫びするのは、第一歩です。次は感謝の生活を続けると共に、このお方に喜ばれる生き方をはじめることです。

Ⅳ．１．　このお方を敬い、慕って生きる

このお方に喜ばれるのは、このお方の素晴らしさ、その栄光を称え、感謝を募らせながら生きることです。このお方を敬い、このお方を崇め、このお方を慕って生きることが、このお方に喜ばれるのです。聖書は、神を愛することが最も大切な第一の戒めであると、教えています。

ところがこの「愛する」という翻訳の表現が、しっくりしません。愛するという日本語は、わずか百数十年前に輸入されたものであること、また、同等もしくは目下の者に対する感情を表す表現であって、自分より高い位の存在、目上の者に向かってはあまり使わないからです。目上の存在に対して、愛の感情も含めて使うことができる日本語は、敬う、慕う、敬愛する、崇めるなどですが、どれを採っても、一つだけでは足りないように感じます。

ただ、敬うあるいは尊敬するというのは、個人的お付き合いがあまりなくてもできることですので、ここからはじめるのが良いでしょう。日本人は天地の創造者である方と、親しいお付き合いをして来たわけではありませんので、まず、天と地を造り、人間を造り、祝福し続けてくださった方を認め、この方を尊び、敬い、尊重して、感謝をし、称えることからはじめるのです。

ありがとうございます。あなたは素晴らしいお方です。（あなたという言葉が変化して、目上の方には使えないようになってしまいましたが、いまだにこれに代わる言葉ができていないために、ここでも使わなければなりません）あなたを崇めます。あなたを賛美しま

すと、言葉で表現し続けることです。天地をお造りになったほどの方ですから、私たちからの物品による捧げ物など、たいした価値がありません。捧げ物自体よりも捧げ物をしたいと思う心が大切なのです。ですからその心を、言葉でたくさん表すのです。山を見ても川を見ても、海を見ても空を見ても、雨が降っても日本晴れになっても、このお方の恵みを感じて、感謝し褒め称えるのです。

そうすると天地をお造りになった方は、その感謝の言葉、賞賛の言葉を受け入れ、そのようにこのお方を認めてこのお方に心を向ける人を、さらに愛で、祝福してくださいます。この方は人間を愛でておられ、人間がその愛に感じて、この方を慕って生きることを最も喜んでくださるのです。そうすると、私たちはいよいよこの方の祝福を受け、このお方の愛の守りの中に生きることになり、それを実感するようになっていきます。造り主である方と人間との正しい関係が、回復されるのです。

Ⅳ．２．　互いに愛し合いながら生きる

このお方に喜ばれる生き方の第二は、人間が愛し合いながら生きることです。このお方は人間を特別に愛しておられるために、人間同士が互いに愛し合い、幸せに生きることを心から望んでおられるのです。このお方に似せて造られているというのはそういうことです。それはまた、人間が憎み、ねたみ、嫌い、争い合いながら生きることを、ことさらに悲しんでおられるということです。

神と表現することに躊躇を感じる天地の創造者は、ご自分の性質に似せて人間をお造りになりました。それはとりもなおさず、人間が愛するという性質を持っているということです。

神を敬い、人間を愛しながら生きるのが人間本来の生き方であり、人間をお造りになった方の、お心にかなった生き方なのです。それは難しい生き方ではありません。なぜなら、そのように生きようとするとき、神が助けてくださるからです。

充分に感謝してこなかった不義理、しっかりと崇めてこなかった不義理を、私たちは「罪」と呼び、これからはもっと感謝をし、お慕いし、喜ばれる生き方をしますという決意を、私たちは「悔い改め」と呼んでいます。

このように勧めるならば、日本人を愛し、日本人のためにもみ子イエス様を十字架にかけて救いの道を備えてくださった神様は、その十字架の贖いの効力のために、日本人を救ってくださるのです。